

非行行動を予防する学校特性の検討

森 下 剛

1. 問題の所在

本研究の目的は、児童・生徒の非行行動を予防しうる学校の要因、すなわち予防的な学校特性を明らかにすることである。児童・生徒の多くの問題行動は、学校教育が抱える長期的な課題の1つである。近年、いじめ、不登校、学級崩壊など、児童・生徒の問題行動は多岐に渡っており、それぞれの問題行動への対応が模索されている段階である。特に、児童・生徒による非行行動は、憂慮すべき状態にある。青少年犯罪の凶悪化が指摘されるのと同時に、児童・生徒による非行事件の増加が指摘されている。例えば、文部科学省(2001)によると、児童・生徒の学校内外での暴力行為は年々増加傾向にあることが示されている。それにもかかわらず、学校教育における児童・生徒の非行行動への対応は、いまだ不十分な状態にある。その原因の一つに、学校での非行行動への対応が、問題が発生してからの事後指導が中心であることが挙げられる。今後の学校教育における非行行動への対応の充実・深化を図るには、問題が発生してからの事後指導だけではなく、問題の発生を未然に防ぎうる予防的なアプローチが検討される必要がある。

児童・生徒の非行行動に関連して、学校・コミュニティの要因は、個人的要因、家庭的要因とともに、児童・生徒の非行行動の促進・阻害に大きく関与することが多く指摘されている(例えば、Doll & Lyon, 1998)。特に学校は、児童・生徒が日常生活の多くの時間を費やす場面であり、児童・生徒の様々な行動に多くの影響を与えていると考えられる。それゆえ、児童・生徒の非行行動を予防するための1つの試みは、学校がより多くの予防的な学校特性を備えることであると考えられる。この予防的な学校特性は、それ自身が介入の対象となると同時に、以下の機能をもつと考えられるからである。それは、①予防的アプローチの適用とそれに対する支持を提供する(Dusenbury et al., 1997)。逆に言えば、学校全体によって支持されないアプローチは、その有効性を減少させる、②児童・生徒の適切な行動、学校内で教えられた新しい行動を強化・般化・

維持する(Orpinas et al., 1996)機会を提供する、③予防的アプローチの有効性を高める学校全体での総合的な活動を可能とする、と考えられるからである。

そこで、本研究では、非行行動を予防する学校特性について、先行研究の展望を通じてその内容を明らかにするとともに、それらの要因の関連を明らかにすることを目的とする。

2. 非行行動を予防する諸学校特性

非行行動を予防する学校特性には、様々な様相の特性が含まれると考えられる。これは、過去の非行予防プログラムが、様々な変数をその介入の対象としたことから明らかである。近年、アメリカ合衆国を中心に、暴力を中心とした非行行動に対する、学校ベースの予防プログラムの開発と実施、またその評価研究が数多く行われている(Howard, Flora, & Griffin, 1999)。これらのプログラムは、カリキュラムによる生徒への教示、教師トレーニング、学校改善など様々な様相を備えている。森下(2001)は、学校における非行予防プログラムの対象を①児童・生徒、②学校内の人的環境、③学校・家庭・地域の関係、④学校内の物理的環境、に分類した。また、Hirschi(1969)は、ボンド理論の中で非行行動を抑止する社会的ボンドの対象となる学校に関連する要因として、学校・教師・仲間とのアタッチメント、進路・成績へのコミットメント、非行行動と両立しない健全な活動へのインヴォルブメント、規範へのビリーフを挙げている。

これらの要因を整理すると、非行行動を予防する学校特性は、以下の様に分類されると考えられる。それは、①学校概要、②学校規律(school discipline)、③教育内容・カリキュラム、④学校内の人間関係、⑤学校経営上の特性、である。それぞれの特性について検討を加える。

(1) 学校概要

学校が置かれている地域や学校の規模は、非行行動の抑止・促進に大きな影響を与えられる。都

市部の学校では、校内暴力を中心とする生徒の非行行動へのリスクが高いことが報告されている(Stoiber & Good, 1998)。これは、都市部における犯罪行為の多さとそれに巻き込まれる可能性の高さなどの地域的なリスク要因、低所得家庭の割合の高さ等の家庭のリスク要因を反映していると考えられる。

また、学校規模・学級規模と児童・生徒による校内暴力の間に関連が示されている。すなわち、大規模校において校内暴力の発生率が高い(ERIC Clearinghouse on Educational Management, 1981)。この理由には、大規模校のもつ特徴の1つとして、学校の非人間性、生徒の学校経営への参加の欠如、他の生徒や教師からの阻害感が存在することが指摘されている(Warner et al., 1999)。すなわち、大規模校では、小規模校と比較して、生徒が積極的に学校の諸活動に参加することが困難となり、一人の個人として生徒が扱われない傾向が高くなり、その結果として非人間的な学校特性が生じることが考えられる。これが校内暴力へのリスク要因となる。

これらの学校が設置されている地域や学校規模という学校概要に関する特性は、意図的に操作することは困難であり、介入の対象とすることは難しい。しかし、非行行動へのリスクの高い学校概要は、予防的なアプローチのニーズが高いことを示唆する。既存の予防プログラムにおいても、都市部の学校をその標的とするものが多く存在する(例えば、Kelder et al., 1996)。すなわち、学校概要のような不可変的な学校特性は、非行行動へのリスクについて1つの指標となる。また、

学校がおかれている地域とその地域に特有のリスク要因を正確に把握し、予防的アプローチのニーズを査定することが、介入の効果を高めるために重要な基盤となる。

(2) 学校規律(school discipline)

学校規律は、児童・生徒の非行行動への対応において非常に重要な特性の1つとして捉えられる。それは、学校規律が児童・生徒の行動を統制する機能を有するからである。ここでは、非行行動を予防しうる学校規律の特性について考察する。学校規律に対して大きく寄与するのが、その学校で用いられる規則と、その運用である。ここでは、有効な学校規則について検討を加える。

Mayer(1995)は、反社会的問題行動を予防する学校規律として、「建設的な規律によるアプローチ」(constructive discipline approach)を提言し、その有効性を示した。この「建設的な規律によるアプローチ」の中では、規則の明確性を強調し、規則の作成・管理について以下の5点を強調している。それは、①教師と生徒による共同作成、②規則の可視性、③教師と生徒による定期的な見直し、④規則を守るときと守らないときの異なる随伴性、⑤肯定文で表現された規則、である。また、Bear(1998)は、過去の研究を展望し、有効となる学級での規則の特徴について、Table 1のように整理している。これらの研究によって示された特徴のうち、特に重要と考えられるものについて以下に検討を加える。

Table 1 学級で作成される有効な規則の特徴 (Bear, 1998, p.20の一部)

-
- ・明確で正当な期待
 - ・学級での行動に関する「すること」「しないこと」
 - ・生徒の規則とその結果の理解を発達させる試み
 - ・少数の重要な規則の重要性の強調
 - ・公平性と発達の適切な適切性
 - ・それぞれの規則についての論理の説明とディスカッション
 - ・発達を通じての生徒のインプット
 - ・それぞれの規則に関連する適切・不適切な行動の例と必要であれば適切な行動の直接教示
 - ・規則違反に対する明確な結果
 - ・子どもと親に対する規則と結果のコピーの配布
 - ・学校の規則との一貫性
 - ・規則と期待される行動の頻繁な思い出し
 - ・学習過程の妨害をしない。すなわち、ルールは、共同的な学習や適切な仲間のディスカッションのような、健康的な仲間相互作用を阻害しない。
-

教師と生徒による共同作成は、その規則が生徒と教師両者の同意によって決定されることを意味する。これは、規則が一方向的に生徒に強要されるものではないことを意図する。これは、生徒に対して規則に対する決定権を委託すると同時に、規則を守ることへの動機づけを高めることに寄与すると考えられる。

規則の可視性と教師と生徒による定期的な見直しは、規則の機能の維持に寄与すると考えられる。規則の可視性は、教師・生徒が、日常的に規則を意識化することを可能にする。規則の定期的な見直しは、規則が守られる程度を明らかにし、守られていない場合、その問題を明らかにするとともに、強調されるべき規則を明らかにし、規則が守られるための方略を検討することにつながる。

規則を守ることと守らないことに対して、結果を伴わせることは、規則が良く機能するために最も重要な要素の1つと考えられる。規則が守られている場合と守られていない場合において、結果が異ならないことは、行動を変容・維持させることにおいて有効とならない。また、このことは、規則の公平性とも関連する。Bear(1998)は、公平性を有効に機能する規則の重要な要素の1つとして取り上げている。規則の公平性とは、全ての児童・生徒がその規則を守ることと守らないことに同様の結果を伴うことを意味する。

肯定文で表現される規則を多く用いることは、望まれない行動を強調するのではなく、望まれる行動を強調することを意味する。これは、望まれない行動を減らすことに直接焦点を当てるのではなく、望まれる行動を増やすことによって、望まれない行動を減少させることを意図する。このことは、規則が罰則的になることを回避する。

罰則的な規則に関する批判が存在する。例えば、Skiba & Peterson(2000)は、ゼロトレランス運動を批判的に考察し、罰則的な学校規則が生徒の問題行動の予防に寄与しないことを指摘した。加えて、Skiba & Peterson(2000)は、罰則としての停学について検討を加え、停学が問題行動を抑制するよりはむしろ、適切なモニタリングのない状況に生徒を置くことによって、非行行動を助長する、学校からの退学等のネガティブな影響につながりうることを指摘している。また、Bear(1998)は、罰則的な規則の弊害について、以下のように指摘している。それは、①向社会的な代替行動を教えることに失敗したならば、それは、生徒に静かに、おとなしく、従順であることを教える、②その効果は短期的である、③問題行動の下にある生徒の認知・感情を交

容させることにほとんど寄与しない、④しばしば、生徒・教師間の関係を傷つける、⑤しばしば、学習に対して非生産的な敵意・報復・感情を産出する。これらの指摘からも、罰則的な規則とその運用を最大限少なくし、向社会的な行動を強化する、問題行動については、その代替行動を教えるように方向づけられた規則が重要と考えられる。

(3) 教育内容・カリキュラム

非行行動を予防する学校特性の1つに、学校で教えられる教育内容・カリキュラムが挙げられる。この特性には大別して2つの内容が含まれる。1つは、学習指導を効果的に行うことにより、間接的に非行行動を予防するものである。これは、児童・生徒の学業面での不達成が非行行動に深く関連する(Gold & Mann, 1982)ことから重視される。もう1つは、直接的に非行行動の予防を目的とした教育内容である。

生徒の学業面の達成の向上は、非行行動の予防に寄与する。Mayer(1995)は、反社会的な問題行動が多発する学校の特性として、生徒の個人差への配慮がほとんどないことを指摘し、ソーシャルスキルと学業技能に関する生徒の個人差を強調することによって、生徒の問題行動を減少させたことを報告した。Warnerら(1999)は、生徒の関心・ニーズ・スタイルに適合した教科カリキュラムの重要性を指摘している。

直接的に非行行動を予防する教育内容は、非行予防カリキュラムとして捉えられる。森下(2001)は、その対象となる児童・生徒から、非行予防プログラムをTable 2のように分類し、非行行動に対する児童・生徒のリスク要因に応じて段階的なプログラムが必要であることを指摘した。特に学校教育においては、全ての児童・生徒がその対象となる普遍的予防プログラムが有効に機能すると考えられる。これらの内容は、学級活動・特別活動を通じて実施されることが可能である。

アメリカ合衆国においては、1990年代後半から、暴力を中心とした予防プログラムの開発と適用、その評価研究が数多く行われている(Howard, Flora, & Griffin, 1999)。これらのプログラムの中で、カリキュラムの形態を取るものの多くは、葛藤解決スキルの向上を目標に上げている。社会的学習理論に基づき、モデリング、ロールプレイ、ディスカッションを取り入れたカリキュラムが多く報告されている。これらの評価研究は、カリキュラムの一定の成果を報告している(Howard, Flora, & Griffin, 1999)が、長期的な視

Table 2 介入の対象となる児童生徒によるプログラム分類(森下, 2001, p. 53)

	普遍的予防プログラム (Universal prevention program)	選択的予防プログラム (Selective prevention program)	必要的予防プログラム (Indicated prevention program)
介入対象者	全児童生徒	一部の児童生徒 (非行行動に共通もしくは、特定の非行行動のリスク要因をもつ者)	一部の児童生徒 (非行行動に関連する精神疾患の診断基準の一部に該当する者)
介入内容	主としてプロテクト要因の促進	プロテクト要因の促進とリスク要因の低減	主としてリスク要因の低減
主たる介入場面	学級を中心とした 集団指導	小集団指導 個人指導	個人指導
主たる介入実施者	担任教諭	担任教諭 特定の担当者	特定の担当者 学校外の専門家

点からのフォローアップ評価は不十分である。

また、Dusenburyら(1997)は、暴力予防プログラムでの内容は個人的・社会的コンピテンス・スキルを促進すべきであると指摘し、その内容として、①行為者、被害者、被害者の家族、友人、目撃者、社会に対する暴力のネガティブな結果についての情報、②アンガーマネージメント(セルフコントロール)③社会的視点取得、④意思決定と社会的問題解決スキル、⑤仲間からのプレッシャーに抵抗するスキル、⑥積極的な傾聴と効果的なコミュニケーション、⑦偏見、性差別、人種差別、男女関係についての題材、を挙げている。

また、課外活動、スポーツ活動を通じて暴力行動を予防するアプローチも報告されているが、これらの活動については、非行行動へのリスクの高い生徒を凝集させる危険性を含むことが報告されている(Coben et al., 1994)。

非行予防カリキュラムの成功のための1つの重要な要素は、それらのカリキュラムに計画性があり、学校教育活動の中に組み込まれることである。Cobenら(1994)は、暴力予防を学校ベースの保健サービスの一部として含めることを提言している。また、Dusenburyら(1997)は、暴力予防プログラムについて最初の学年から始められ、学年段階を通じて強化されること、発達の適切な介入が重要であることを提言している。これらの指摘は、カリキュラムが計画性を持って、系統的・長期的に行われるべきことを示唆する。非行予防カリキュラムについてもこれは同様である。暴力、性に関する問題、薬物アルコールに関する問題など、非行行動に関連するトピックを整理し、系統的に行わ

れることがカリキュラムの効果を高めると考えられる。

(4) 学校内の人間関係

学校内の人間関係もまた、非行行動を予防する学校特性の1つとして捉えられる。学校内の人間関係には、生徒間関係、生徒・教師間関係、教師間関係の3つに分類される。以下それぞれについて検討を加える。

1) 生徒間関係

生徒相互間の人間関係は、非行行動の抑止・促進両方に寄与する。肯定的な関係は、非行行動の抑止に寄与すると捉えられる。一方で、集団による非行行動の存在が示すように、否定的な関係は、非行行動の促進に寄与する。西村(1988)は、悪友との接触が非行行動に強く関連していることを明らかにしている。肯定的な生徒間関係は、非行行動を予防する学校特性の1つであり、この関係を構築するアプローチの1つがピアサポートである。ピアサポートとは、「仲間や同僚による社会的支援」(中野, 2001)である。ピアサポートは、特定の集団において自然に形成されるものだけでなく、系統的に教えられることによって高められる。

また、生徒間の対人的な問題解決、特に暴力の問題に関連するアプローチの1つとして、ピアメディエーションが挙げられる。ピアメディエーションは、暴力予防プログラムにおいて、葛藤解決スキルとともに強調されるアプローチの1つである。ピアメディエーションとは、仲間による仲介の技法をトレーニングすることにより、対人葛藤の進行を予防するアプローチである(Orpinas et al., 1996)。通常、特定の生徒に対し

てピアメディエーションの技法を教えられ、その生徒がピアメディエーターとして仲間の対人葛藤問題の仲裁役を担う。Orpinasら(1996)はまた、特にトラブルメーカーやギャングリーダーがピアメディエーターとされた場合、最も有効に機能することを報告した。これは、ネガティブな行動で仲間の支持を得ていた生徒のリーダーシップを向社会的なものに変容させることの重要性を指摘する。

2) 生徒・教師間関係

生徒と教師の関係は、直接的には非行行動に関連しない。森下(2000)の調査では、非行行動を示す生徒とそうでない生徒との間で、肯定的な教師との関係に差異が見られなかった。この結果は、生徒と教師の肯定的な人間関係を築くことのみが非行行動を予防することにつながることを示唆する。しかし、生徒と教師の肯定的な関係は、学校規律、教育内容・カリキュラムの効果に影響を与えられと考えられる。Bear(1998)は、規律問題を予防する方略の1つとして、生徒個人に対して積極的に興味を示すことを挙げている。肯定的でない生徒と教師の関係は、非行予防のための活動の効果を低減させる。Dusenburyら(1997)は、有効に機能しない暴力予防プログラムの特徴の1つとして、肯定的な学校風土によって支持されていない相互作用的なプログラムを用いることを挙げている。これは、生徒間関係とともに生徒・教師間関係においても共通すると捉えられる。

3) 教師間関係

教師間関係もまた、間接的に児童・生徒の非行行動に影響を与える。Mayer(1995)は、「建設的な規律のアプローチ」の中で、教師への支援を高めるため、職員士の士気、コミュニケーション、団結力を高めるよう設計されたプログラムを用いている。これらのプログラムでは、教師の実践に対する肯定的なコメントを相互に与えることを強調している。逆に、否定的な教師間関係は、非行行動への予防的アプローチの障壁となる。Orpinasら(1996)は、暴力予防プログラムの実践過程において、教師間の派閥抗争がプログラム実践の妨げとなったことを報告している。

また、瀬戸(2000)は、高校の教職員を対象とした調査から、学校組織特性の下位構造として、「学習充実」、「協働性」「職場満足」を挙げており、これらがスクールカウンセラー連携の有効度と関連していることを明らかにしている。このことは、非行行動の予防的アプ

プローチについて1つの示唆を与える。学校における非行予防は、学校内の職員のみならず、学校外の専門家であるカウンセラー、司法関係者、メンタルヘルスの専門家等との連携を必要とする。これらの学校外専門家との連携を有効にする上でも、教師間の協働性を高めることが重要であることを示唆する。

4) 思いやりの共同体としての学校

これらの学校内の人間関係に焦点を当てたアプローチが「思いやりの共同体としての学校」(School as Caring Community)である。Bakerら(1997)は、思いやりの共同体としての学校を目標とした「Child Develop Project」を概観し、その構成要素を以下のように整理した。それは、①共同的な学習活動と学校教育の機能としての子どもの発達への計画的な焦点によって高められる、生徒間と生徒・教師間の親密で思いやりのある関係、②子ども達に自己決定と学級活動への影響の機会を与える構成主義的学習理論に基づく、魅力ある適切なカリキュラム、③向社会的な価値を教えるためのカリキュラムの使用と全ての学校レベルでの日々の相互作用において、道徳的な行動のモデリングによって向社会的な価値を実践し、利益を得る機会、④学級で思いやりの共同体を構築するための責任を生徒に共有させるために民主主義的なプロセスを用いる発達の規律、⑤家庭と学校の親密な連携、⑥子ども達に愛他主義を発達させ、他者との関係と思いやりを経験する機会を提供する学校サービスプログラム、である。「Child Develop Project」を実施した学校において、教師への尊敬、学業への動機づけを含む学業要因、葛藤解決スキル、向社会的な動機づけ、愛他的な行動を含む社会的・個人的態度と強く関連したことが示されている(Battistich et al, 1995)。この結果は、非行行動の予防において、学校間の人間関係をより思いやりのあるもの、向社会的行動を強調すること支持するものとして捉えられる。

(5) 学校経営上の特性

ここでは、非行行動を予防する学校経営上の特性について考察する。ここで特に重視されるのが、管理職による職員の支援と、非行行動を予防するための教育活動を管理する組織委員会の設定である。

管理職による職員の支援に関連して、Mayer(1995)は、生徒の問題行動に関連する要因の1つとして、管理職の職務不履行と一貫性のなさを指摘している。また、この管理職による職員への支援の少なさは、生徒

の行動を統制するために懲罰的な方法を用いることを助長することも指摘している。この罰則的なアプローチは有効でないことは、先に記述したとおりである。また、Smithら(1993)は、生徒の問題行動を予防する試みである、健康カリキュラムの実施において、支援的な管理職がその成功のカギとなることを指摘している。

非行行動を予防するための教育活動を管理する組織委員会は、以下の役割を担う。それは、①教育計画のニーズの査定、②教育計画の立案、③教育計画遂行のモニタリング、④教育計画の評価、⑤教員間の連絡調整、教師トレーニング、⑥学校外部機関との連携、である(Orpinas et al., 1996; Stephens, 1994)。この組織委員会の構成員としては、管理職、生徒指導主事、養護教諭、保健指導主事、担当教員等が含まれると考えられる。この組織委員会が教育計画の主導権をもち、アカウントビリティを保証することが、非行行動を予防するための教育計画を有効なものとする。

3. 諸特性の関連

ここでは、先の述べた非行行動を予防する学校特性について、それぞれの関係を検討する。Fig. 1は、諸特性の関連について、仮説的に示したものである。

学校概要の特性は、不可変的なものとして、その学校の生徒の行動に影響する。それには、学校規模、学校が置かれている地域の特性等が含まれる。これらの学校概要のもとに、可変的な学校規律、教育内容・カ

リキュラム、学校内の人間関係、学校経営上の特性の学校諸特性が含まれると考えられる。

意図的に変化される諸特性の中で、学校経営上の特性は、学校規律実践、教育内容・カリキュラム、学校内の人間関係の諸特性を強固なものとする基盤を提供する。すなわち、①学校規律を学校全体で一貫性のあるものとすることを保証する、②教育内容・カリキュラムに関して、教育的アカウントビリティを保証するとともに、その実践に対するモニタリングと評価を提供する、③教員間の協働性を高め、教師間の関係に影響を与える。

学校規律、教育内容・カリキュラム、学校内の人間関係は、相互に影響を与えるものである。教育内容・カリキュラムは、その活動と教えられる内容を通じて、直接的に学校内の人間関係に影響を与える。また、学校規律は、教育内容・カリキュラムを通じて教えられた内容に関して、学校場面全体を通じて強化・維持する方略として機能する。また、学校内の肯定的な人間関係は、学校規律の促進、教育内容・カリキュラムの効果をも高めることに寄与する。これら相互の関係について、Dusenburyら(1997)は、肯定的な学校風土、学校文化を促進するために設計された活動が、良い規律を促進するための効果的な学級経営ストラテジーの基礎となることを指摘している。また一方で、肯定的な学校風土によって支持されていない相互作用的なプログラムを用いることは有効でないことを指摘している。これらの指摘は、学校規律、教育内容・カリキュラム、

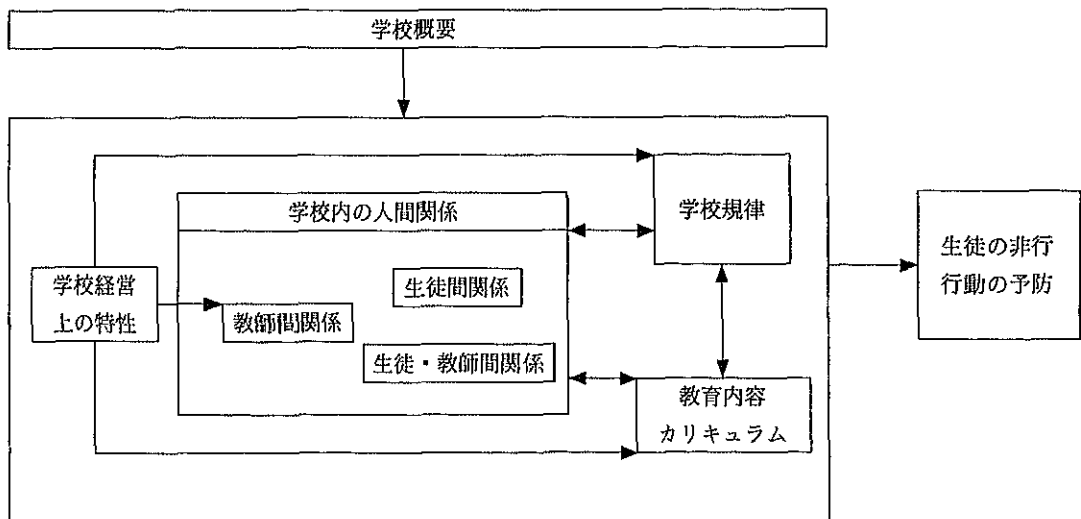


Fig. 1 非行行動を予防する学校特性間の関係

学校内の人間関係が相互に影響するものであり、それぞれが欠かすことのできない特性であることを指摘している。

4. 結論

本論文では、非行行動を予防する学校特性として、①学校概要、②学校規律、③教育内容・カリキュラム④学校内の人間関係、⑤学校経営上の特性、を挙げそれぞれの特性について検討を加えるとともに、諸特性間の関連を示した。

学校が児童・生徒の非行行動への予防的なアプローチを検討する際、この枠組みは、1つの有益な情報を提供する。すなわち、これらの諸特性について、各学校がどの程度その特性を備えているか、学校に欠けている特性はどのようなものであるかについて検討することが、介入の対象となる要因を明らかにする。

今後の課題は大きく分けて3点ある。1つ目の課題は、これらの学校特性に関する実証的研究の必要性である。本論文は先行研究の展望をもとに、非行行動を予防する学校特性について検討を加えた。しかし、これらの特性が、どの程度の影響をもつて児童・生徒の非行行動の予防に寄与するか、特性間の影響力の差異については言及されなかった。今後は本論文で示した、特性間の関係、特性の持つ影響力について、その妥当性を検討する必要がある。この課題は、複数の学校を対象とした調査研究を通じて達成される必要がある。

2つ目の課題は、生徒の個人差をどのように考慮するかである。児童・生徒の非行行動は、本論文で述べた学校特性以外にも、個人的要因、家庭的要因によっても大きく影響される(森下, 2000)。また、個人的要因は、特に学校内の人間関係において個人差を生じさせると考えられる。ここで述べた学校特性が個々の生徒にどのように作用するか、その影響力の差異についても検討される必要がある。

3つ目の課題は、これらの学校特性が児童・生徒の学校外での行動にどの程度影響を与えるかを検討することである。ここで検討した学校特性の一部は、児童・生徒の学校内での行動、特に校内暴力を中心とした非行行動に限定される。学校内での学校規律、学校で教えられた教育内容、学校で形成された肯定的な人間関係が学校を超えて、学校外で維持・一般化されうる程度についても検討される必要がある。

5. 参考文献

- Baker, J. A., Terry, T., Bridger, R., & Winsor, A. 1997 School as caring communities: A relational Approach to school reform. *School Psychology Review*, 26, 586-602.
- Battistich, V., Solomon, D., Kim, D., Watson, M., & Schaps, E. 1995 School as caring communities, poverty levels of student populations, and students' attitudes, motives, and performance: A multilevel analysis. *American Educational Research Journal*, 32, 627-658.
- Bear, G. G. 1998 School Discipline in the United States: Prevention, Correction, and long-term social development. *School Psychology Review*, 27, 14-32.
- Coben, J. H., Weiss, H. B., Mulvey, E. P., & Dearwater, S. R. 1994 A primer on school violence prevention. *Journal of School Health*, 64, 309-313.
- Doll, B. & Lyon, M. A. 1998 Risk and resilience: Implications for the delivery of education and mental health services in schools. *School Psychology Review*, 27, 348-363.
- Dusenbury, L., Falco, M., Lake, A., Brannigan, R., & Bosworth, K. 1997 Nine critical elements of promising violence prevention programs. *Journal of School Health*, 67, 409-414.
- ERIC Clearinghouse on Educational Management 1981 *Violence in the schools: How much? What to do?* (Research Action Brief No.17; ERIC Document Reproduction Service No.ED 208 453) Washington, DC: National Center for Education Statistics.
- Gold, M., & Mann, D. W. 1982 Alternative schools for troublesome secondary students. *Urban Review*, 14, 305-316.
- ハーシー, T. 森田洋司・清水新二監訳 1995 非行の原因 文化書房博文社 (Hirschi, T. 1969 *Causes of Delinquency*. University of California Press).
- Howard, K. A., Flora, J., & Griffin, M. 1999 Violence-prevention programs in schools: State of science and implications for future research. *Applied & Preventive Psychology*, 8, 197-215.
- Kelder, S. H., Orpinas, P., McAlister, A., Flankowski, R., Parcel, G. S., & Friday, J. 1996 The Students for Peace project: A comprehensive vio-

- lence - prevention program for middle school students. *American Journal of Preventive Medicine*, 12, 22-30.
- Merrell, K. W. 1993 Using behavior rating scale to assess social skills and antisocial behavior in school settings: Development of the school social behavior scale. *School Psychology Review*, 22, 115-133.
- Meyer, G. R. 1995 Preventing antisocial behavior in the schools. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 28, 467-478.
- 文部科学省初等中等教育局 2001 生徒指導上の諸問題の現状について.
- 森下剛 2001 特別活動における非行予防プログラムの可能性—歴史的検討とプログラム分類から— 日本特別活動学会研究紀要, 9, 43-53.
- 森下剛 2000 学校における非行予防プログラムの開発・適用に関する研究—中学生の非行行動に関連する要因の分析を中心に— 筑波大学大学院博士課程教育学研究科平成11年度修士論文 (未公刊).
- 中野良願 2001 ピアサポート 國分康孝監修 現代カウンセリング事典 金子書房 p.26.
- 西村春夫 1988 社会的コントロール理論の検証—非行を抑えるコントロールの不足か, 非行へ導く動機のか— 西村春夫編 少年非行 ソフトサイエンス社 Pp.68-78.
- Orpinas, P., Kelder, S., Murray, N., Fourney, A., Conroy, J., McReynolds, L., & Peters, Jr. R. 1996 Critical issues in implementing a comprehensive violence prevention program for middle schools: Translating theory into practice. *Education and Urban Society*, 28, 456-472.
- Roberts, W., Hom, A., Battistich, V. 1995 Assessing students' and teachers' sense of the school as a caring community. Presented at the meeting of the American Educational Research Association, San Francisco, CA, April 18-22. Eric date filmed March, 28, 1996 (ED 388 675)
- 瀬戸健一 2000 高校における教師とスクールカウンセラーの効果的連携の研究—高校の学校組織特性に着目した連携モデルの開発— 筑波大学大学院教育学研究科教科教育専攻学校教育コース平成11年度修士論文 (未公刊).
- Skiba, J. L. & Peterson, R. L. 2000 School Discipline at a crossroads: From zero tolerance to early response. *Exceptional Children*, 66, 335-347.
- Smith, D. W., McCormick, L. K., Steckler, A. B., & McLeroy, K. R. 1993 Teachers' use of health curricula: Implementation of Growing Healthy, Project SMART, and the Teenage Health teaching modules. *Journal of School Health*, 63, 349-354.
- Stephens, R. D. 1994 Planning for safer and better schools: School violence prevention and intervention strategies. *School Psychology Review*, 23, 204-215.
- Stoiber, K. C. & Good, B. 1998 Risk and resilience factors linked to problem behavior among urban, culturally diverse adolescents. *School Psychology Review*, 27, 380-397.
- Warner, B. S., Weist, M. D., & Krulak. 1999 Risk factors for school violence. *Urban Education*, 34, 52-68.

A Study of the School Characteristics for Preventing Delinquent Behavior

Go Morishita

The purpose of this article is to identify the school characteristics that prevent students' delinquent behavior. Five school characteristics are discussed by reviewing prior studies. Five school characteristics are as follows: (1) School outline (including school size and location of the school), (2) School discipline, (3) Curriculum, (4) Human relationship in the school (including among students and teachers, and between students and teachers) (5) School management that promotes preventive efforts.

The Summary of this article is as follows:

- (1) School outline prescribes the risk factors associated with students' delinquent behavior. Bigger schools and urban schools tend to have higher risk factors. However, school outline is unchangeable, this reflects the level of the needs of preventive efforts.
- (2) Effective school discipline strategies include the use of the rules that are characterized by following: cooperative institution by teachers and students, visibility and reexamination, consequences of the rules, and the rules that emphasize pro-social behavior. On the other hand, punitive school discipline strategies tend to be ineffective.
- (3) One of the curriculum that contributes to prevention is to promote students' academic skills. These need to emphasize the individual students' difference. Another one are the delinquency prevention curriculum. The effectiveness of the curricula that develops students' conflict resolution skills is discussed. These curriculum need to be integrated into the school health service.
- (4) Positive Relationship between the students that prevents delinquent behavior is developed by peer support and peer mediation program. Positive relationship between teachers and students, and among teachers promotes preventive efforts in the schools. As an example of relational approach, "School as Caring Community" is discussed.
- (5) Staff supports from administrative person and committee that are accountable for preventive efforts are needed.

The relation between five school characteristics is also discussed. Finally, the limitation of this study and the direction of future research is discussed.